

「青年の祝祭とともに祈り、見つけた自分の使命」

カトリック潮見教会
先崎まこ (Mako Senzaki)

私は7月28日から8月3日まで、イタリアのローマおよびヴァチカン市国で開催された Jubilee of Youth（青年の祝祭）に参加いたしました。世界中の同じ信仰の若者たちと共に祈り、歌い、歩んだ日々は、私にとってかけがえのない恵みの時でした。

特に、サンピエトロ広場や教皇ミサの会場である Tor Vergata で「Jesus Christ, You Are My Life」や「Emmanuel」を歌いながら教皇レオ 14 世を迎えたことは忘れられません。その喜びと希望に包まれた一体感は、帰国した今でも胸に鮮明に焼きついています。日常の中でふと思い出すたびに、大きな力と勇気を与えてくれます。

また、この日々を過ごす中で、ミサの多様性に改めて気づく事が出来ました。私はイベント施工会社で働き、東京都心の様々な催事に携わっています。その中で信者でない先輩と「ローマの若者の祝祭では野外でフェスのようなミサをやります」と話す機会がありました。彼がその動画を見て「俺の知ってるミサじゃない！」とカルチャーショックを受けていた姿が深く印象に残っています。

歴史ある教会の祭壇で司祭が会衆に背を向けて捧げるミサ、日本の教会のミサ、野外フェスのようなミサ。どれも同じ「感謝の祭儀」です。教皇ミサの会場には、太鼓やギターに合わせて踊り歌う青年もいれば、静かに黙想する青年もいます。どれも主なる神への祈りであり、違いを尊重しながら、一つの祭壇に集えることの喜びを実感しました。

一方で、教皇ミサの会場や市街地では、ポイ捨てや騒音に不満を抱く市民がいる現実を SNS で突きつけられました。教皇ミサにあずかり、喜びに満ち溢れた青年たちが去った後の会場はひどく荒廃し、まだ食べられるフードキットが無造作に捨てられている光景にはとても胸が痛みます。

この現実、イベント施工管理者を目指す私にとって大きな課題を示してくれました。催事は多くの人に感動や希望を届けられますが、同時に地域社会との調和や環境への配慮も必要です。

私はこの巡礼を通して、運営のために夜通し働き、青年たちを支えてくださったすべての方々、そして世界中のイベント業界で働く仲間のために心から祈ることが、今の自分に与えられた大切な使命であると深く気づきました。

教皇さまは歓迎の挨拶で、青年たちを「地の塩、世の光」と励まし、「人々に希望と平和をもたらすように祈る」ことを勧められました。私も自分に与えられた賜物を生かし、社会の中でその言葉を実現する者となれるよう、祈り、行動していきたいと思います。